■忘れられた儒教精神

「教育の本義は親子の交はりに在る」とは既に述べた所ですが、その理想的な在り方については、中国で興り中国で発達した儒教に詳しく述べられてゐます。我が国は、有史以来徳川時代まで、絶えず中国の文化を取入れる事に努めて来ましたので、儒教は常に我が国の教育の支柱となってゐて、それは明治維新の原動力ともなったものです。然るに、明治政府は、新しい西欧の物質文明を取入れる事に汲々とする余り、伝統の儒教を軽んずるやうになり、その風潮は昭和の敗戦で一層甚しくなりました。

その結果、僥倖を得て経済的には大発展を遂げましたけれども、これを支へるべき精神文化が頽廃した為に、その経済力を真に活かす術を知らず、その為折角発展途上国に対して多大の援助をしながら、外国人から感謝され、経済大国と尊敬されるはずなのに、逆にエコノミックアニマルといふ蔑称を受ける有様です。

前にも述べた事ですが、二宮尊徳翁は、「世の道徳を説く者は多くは経済を軽んじ、経済を説く者は道徳を軽んず。共に過ちなり」と喝破して、「物は心によって初めて価値を生じ、心は物によって初めて生きた働きをする」ものですから、「物と心との調和がいつも保たれるやうに心掛けなければならない」と警告しています。

翁はその事を巧みにも水車に譬(たとえ)へてゐます。水車は下の半分が水に漬(つか)り、上の半分が水の外に出てゐてそれで初めて回転し、その働きを発揮します。水車が水から離れてしまったら全く回転せず、水にすっかり漬ってしまったら回転しないばかりか壊れてしまひます。その水車を人に、水を欲望に譬へるのです。人は半分だけ欲望に従って働き、半分は欲望から離れ、然も欲望とは逆の方向に進まないと、人も水車と同じで真の働きは出来ないと説きます。水車の上半分と下半分とは逆の方向に進んで回転するやうに、「人間も半ばは欲望に従って働いて財を蓄へ、半ばは欲望に背いて財を推譲しないと真の繁栄は無い」といふ翁の教へは真(まこと)に納得しやすいものです。